

描かれた美しいふろしきを広げて見せてくださるたびに、参加者からはため息がもれ、カメラが向けられた。

次に、直方体の箱を使って、最も基本的な包み方である「お使い包み」を習う。包み方だけでなく、訪問先で贈り物を渡すときのふろしきの開き方やたたみ方、贈り物の渡し方などの所作も教えてもらう。また、ふろしきと似ている袱紗の使い方も。そして、そういった決まりが単なる形式ではなく、相手への心づかいをあらわすものであることも学んだ。

そのほかにもお弁当箱、ビール瓶、ボールなどを

使って、上に花飾りがついているように見える結び方、バッグのように持ち手を作る結び方など、いろいろな使い方を教えていただいた。

先生が「ふろしきは実に自由自在（バーサタイル）なもの」と言っていたが、たった1枚の布で形も大きさも異なる物を包むことができるふろしきのように、私たちの社会もいろいろな文化や考え方を包むものであってほしいな、と改めて考えさせられた「からふるカフェ」であった。

●水嶋いづみ (EIWAN 運営委員)

第10回「からふるカフェ」@福島市

12月13日、第10回のからふるカフェを開催した。テーマはあえて特に設定しませんでした。2015年4月から始まった「からふるカフェ」をふり返り、2016年のからふるカフェのテーマをともに構想しようというもの。参加者は、いままでのカフェに来てくださった方と、今回初めて参加してくださった方を合わせて17名が集まり、中国、韓国、フィリピン、日本と4カ国出身者で、わきあいあいと楽しく話し合うことができた。

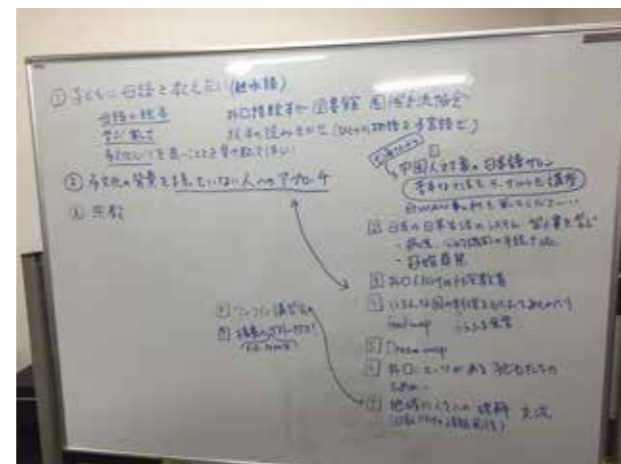
話し合いの内容は、からふるカフェに期待するテーマから、EIWANの活動としてとりあげて欲しいもの、地域の人びととの交流の方法など、広範囲にわたった。たとえば、外国にルーツを持つ女性や子どもたちに対する理解や、当事者が自分のルーツに誇りを持てるような機会をどういうふうに、具体的につくっていきけるか。どうしたらもっと地域の人たちとの「出会いの場」をつくっていきけるのか。こうしたことを、リラックスしながらも真面目に話し合うことができた。

2015年に始まったEIWANからふるカフェは、福

島市を拠点としながらも、郡山市、二本松市、須賀川市でも開催してきた。毎回毎回、ゲストスピーカーの方々と参加者のみなさんから、素敵な出会いと多文化についての学びの機会をいただいた。心から感謝申し上げます。

2016年は、みなさんからいただいたアイデアをもとに、できるところから実現させていきたいと思う。今後ともよろしくお願いします！

●土田久美子



福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 (JR福島駅西口から徒歩7分)
電話 080-8215-1556 メール eiwan311@gmail.com
ホームページ <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>
フェイスブック <https://www.facebook.com/eiwanfukushima>



福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

Empowerment of Immigrant Women Affiliated Network

第12号

◆発行◆ 2016年1月11日 (隔月刊)

研修会「未来をデザイン！ 女性と描く復興～」

報告

ジェンダー問題とマイノリティ問題

●李善姫 (EIWAN 協力委員)

2015年12月18～19日、鳴子温泉で開かれた日本NPOセンターの研修会「未来をデザイン！ 女性と描く復興とこれからの地域社会」に参加した。被災3県で、とくに女性と子どもに関わるNPO17の団体（岩手2、宮城8、福島7）から関係者が参加した。EIWANからは裘さんと私、運営委員の水嶋さんが別グループの代表として研修会に参加した。

1日目は、各団体紹介の後、立教大学の教授であり日本NPOセンターの副代表理事の萩原なつ子氏により、「なぜ女性を支援するのか」というレクチャーがあった。その後のワールドカフェでは、参加者同士で、女性支援の活動上の課題点を出し合い、その中で共通の点を見出して、解決策を議論する時間を持った。私が参加したテーブルでは、「女性たちが自己主張をしない」「空気を読みすぎ」「協力しない」「家族中心」という課題が出た。いろいろな話の中、「女性たちが自己主張をしない」「空気を読みすぎ」という課題に関しては、自尊心の欠如が原因ではないかという話があり、女性たちを褒めることの大切さが話し合われた。別なテーブルからは、「女をつぶすのは女」といった課題も出た。現場で働いている方々だからこそのような課題が多くあったが、時間の関係でより深く議論することができなかったのは、残念だった。

2日目は、岐阜県大垣市で20年前から活動をしている「NPOくすくす」の活動ノウハウを聞いた。20年前に作ったという替え歌（日本の女性問題を歌詞にした）の披露もあり、その歌詞が今でも通用するということが、皆で笑いながらうなずいた。それから、神戸で阪神大震災後に行政職で復興事業を担当し、現在は神戸学院大学の清原桂子教授の神戸の復興とまちづくりに関する話を聞いた。NPOが行政とどのように付き合うべきなのかが話された。

移住女性支援は、日本の女性と子どもの支援の中で、当然ながら含まれなければならない課題である。しかし、多くの場合は、行政側からも市民セクターのほうからも、少数者の移住女性たちとその家族のことが目隠しにされていることが、事実であろう。EIWANの地道な活動によって、ジェンダー問題とマイノリティの問題が別個ではないことに、多くの方が気づいてほしい。そのためにも、今度のような地元の研修会に、より積極的に参加する必要がある、と実感した機会となった。

今後のつながりに期待

●裘哲一 (EIWAN 運営委員)

研修会に遅れながら、李善姫さんと会場へ向かった。17団体25名の参加者の内に、男性は二人だけ。女性が多いのは、女性支援グループの特徴(?)。

各団体の紹介を順番にやっているところでした。子育て支援、ジェンダー平等、高齢者支援、障害者サポーター、地域つなぎ、地域活性化、震災関連な

どをテーマにしている。EIWANの紹介は、簡単に目的と主な活動を話したが、移住女性支援団体はEIWANだけだった。

夕食後、自由交流の時間で、先輩ママの育児経験談や活動逸話を聞いた。とくに気になる事例があって、みんなの議論となった。その一つが、福島県の仮設住宅に一人暮らししている、日本と外国とのダブルの15歳少年の話。

震災後、自宅は放射線被害で住めなくなり、仮設住宅に引っ越した。お母さんは少年を連れて、賠償金で母国に家を建てることにした。夫に内緒でそれを進めていたことがバレ、両親が離婚。少年は日本生まれなので、母親の母国で言葉の壁を感じ、一人で福島に戻った。月々何万円かお母さんから仕送りがあるのみで、生活が苦しい。ライフラインも止まり、

第6回「からふるカフェ」 @「未来館フェスティバル」

9月5日、第6回からふるカフェを、二本松市の福島県男女共生センター「未来館フェスティバル」で開催した。

当日は、男女共同参画に関連する団体のブースやワークショップ、展示など、楽しくてためになる催しがたくさん行なわれた。

私たちEIWANは、「外国人に、<やさしい日本語>で伝える災害情報」と題してワークショップを開催。講師は、EIWAN運営委員であり「京都日本語Rings」代表の花岡正義さん。ただ、同時帯に

第7回「からふるカフェ」 @福島市

9月27日、第7回目のからふるカフェのテーマは、「日本語サロンでサポーターをしてみませんか?」。EIWAN日本語サロンのサポーターや、サポーターに関心がある方と一緒に、移住者が日本語を学習するときどのようにサポートをしたらいいのかを学んだ。講師は花岡正義さん。

実際に日本語学習のサポートは、どうあればいいのでしょうか? いざ日本語サロンに参加してみる

栄養不足でげっそり。支援団体は児童相談所につながったが、優先順位が低いと判断されたためか、保護できずにいる。本人も人間不信となり、不登校、面会拒否とドンドン孤立、この先が心配だという。なんとか元気づけたいとみんなが意見を出し合ったが、宿題となった。

二日目は、岐阜県の「NPO法人くすくす」の事例紹介。理事長と理事の三人が分かりやすく、時には通い歌を唄いながら取り組みを語ってくれた。孫育てサロン、三世同居ママの話がとても印象的だった。

参加した団体の半数以上(11団体)が、震災後に設立した新生団体なので、今回の参加はお互いに刺激と参考になったと思う。交流ができて、横の繋がりを今後も期待できそう。

超人気プログラムと重なってしまったため、地元の参加者は1名だった。しかし、災害時に必要な「やさしい日本語」を一緒に考え、じっくりお互いの関心を共有でき、とても充実した時間になった。

また、福島県内で活躍されている他団体のみならずとも交流することができた。多文化共生とジェンダーは切り離せないトピック。EIWANとしても、堅苦しくなく、でもまじめにこの2つのトピックを、活動に組み込んでいきたいと思った一日であった。

●土田久美子 (EIWAN 事務局)

と、これはなかなか難しい問題だと気づく。花岡さんは、日本語学習者はみな、「生活者としての外国人」なのだ、ということ 강조했다。そしてサポーターは、「教える」のではなく、「学習を手伝う、サポートする」という意識を持ったほうがいいのではないかと。

休憩時間には、花岡さんにご用意いただいた京都のお菓子とお茶を楽しみ、その後は、参加者の方々

からの質問や疑問をみんなで共有した。

参加者からは、学習をサポートしていて迷うこと、楽しいこと、「学校で習った日本語と外国人に教える日本語はずいぶん違うと感じた」、「日本語の奥深

第8回「からふるカフェ」 @福島市



10月25日、第8回「からふるカフェ」のゲストは、台湾出身の大内翠(余翠珍)さんをお迎えした。大内さんは東京の音楽大学に留学するため、18歳で来日。3ヵ月ほどしてアルバイトを始めた居酒屋で、将来夫となる男性と出会う。大学卒業後、結婚して夫の故郷である福島へ。都会の台北や東京に住んでいた大内さんは、大きなカルチャーショックを受ける。茅葺屋根の家、風呂もトイレも母屋の外、天井からへびが落ちてきたり、天井裏でネコがネズミを追いかけるとススが落ちてきたり……。これは数十年前の東北農村ではよく見られた光景だが、さらに義父母の話す方言もよく聞き取れず、子どもが

さを再認識した」などの感想をいただいた。

今後の日本語サロンに活かしていきたい。

●土田久美子

生まれるまでは、なかなか家族として受け入れてもらえなかったそうである。

結婚当初から、自宅でピアノ教室を開く。最初は生徒数も少なかったのが、丁寧な教え方が評判になり、震災前には生徒が80人にもなったという。

現在、大学生、高校2年生と1年生の3人のお子さんがある。一番上の子どもが小さい頃は中国語で話していたが、友達にからかわれたこともあり、それ以来、中国語は教えていない。それでも子どもは今、大学で中国語を勉強しているという。

大内さんは、ピアノを教えるかたわら、震災の2年前に立ち上げた台湾出身の人たちのサークル「台湾同郷会」で、国際交流イベントや中国・台湾にルーツを持つ子どもの中国語でのサポートなど、幅広い活動をされている。

苦勞したことも笑い飛ばすように語る大内さんの包容力のせいか、参加者とのフリートークでは、別の国出身の移住女性から子育ての悩みを相談される場面もあった。国境を越えた女性同士のつながりが福島に生まれつつあるようで、EIWANとしてとても嬉しく感じた一日であった。

●土田久美子

第9回「からふるカフェ」 @須賀川市



11月28日、JR須賀川駅2Fのコミュニティプラザで開催した第9回からふるカフェは、中国出身のお母さんたちのグループ「つばさ〜日中-half支援会」が企画した「ふるしきの使い方」講座。教えてくださったのは、永島きもの学院(福島市)の永島絹子先生。

まずは、先生が持参されたさまざまな素材や柄のふるしきを見せていただきながら、ふるしきの起源、織りと染めの格の違い、季節感の大切さなどを教えていただいた。先生が四季折々の植物や風物が